分権時代の新しい公を支える地域主体の構築

—「地元学」による持続可能な地域づくり—

地元学ネットワーク主宰
吉本 哲郎

吉本 哲郎（よしもと てつろう）

1971年宮崎大学農学部卒。同年水俣市役所に入る。都市計画課、企画課、農林水産課長、環境課長、水俣病資料館長を経て2007年退職。地元学ネットワーク主宰。鹿児島大学生涯学習教育リサーチセンターアドバイザー。著書に『地元学をはじめよう』岩波ジュニア文庫、『私の地元学』NECクリエイティブ、他。

公と私の対立—共の弱体化—

司会 「分権時代の新しい公を支える地域主体の構築」と少し硬く書いてあったのは、私の責任です。あとで吉本先生が、いろいろお話しになるとと思いますが、この文の中に2カ所問題点があります。1つは「分権」。権を分けるというのは上からの発想だからこれは「地域主権時代」と書くべきでした。それから「新しい公を支える地域主体」。「支える」という関係性がいいのかどうか、ということに今日はかなりこだわっておられて、私が混乱させたせいか、ちょっと準備が足りないと言っておられました。

今日はいろいろなお話をお聞きできると思います。吉本先生が身につけておられる首飾りはアマゾンの部族のもので、昨年アマゾンに行かれてからどうも首飾りが吉本さんから離れなくなりまして、どういう魔術があるのか知りませんが、この辺は「「地元学」による持続可能な地域づくり」の魔力がどこかにあるんじゃないかと、私は思っています。今日はそういうことも含めて、お話をいただきたいと思っています。

吉本 よろしくお願ひいたします。「新しい公」、これが曲者ですね。分権はどちらから見ると、地域主権か、分権かというのはもう自ずとわかっていただけだと思います。

分権というのは「分けてください」というお願いですが、これは分捕る力がないと無理ですね。昔はこれを革命と呼んでいましたが、お願いするという、ただ生半可なものではないと思います。

それから「新しい公」ということについて、私の考えを言っておきましょう。「公」と「共」と「私」という簡単に3つ分けますと、「公」はだいたい行政、「共」はNPOとNGOが本当はあるのですが、自治会だと思っていただければ。そして、「私」というのは“わたくし”ですね。私が経験した中でも、「共」という領域の取り組みがかなりやせ細ってきていることは散見されます。

私が担当していた頃、増えてきたのが産業公害以外の生活公害、特に騒音やご近所迷惑が結構増えてきて、ご近所のトラブルはご近所もしくはその地域の年をとった人とか、それから自治会が解決していたんですが、そこがもう放り投げられてしまって、隣近所の

トラブルが行政にまで持ち込まれるようになってきたというのが、私の経験です。

これは何が起きているのかと考え込まれましたが、結果的に「共」という領域がやせ細っている、というのが実感でありましたし、今、それが進行していると思っております。そして「公」と「私」が直接ぶつかっています。隣の人がうるさいのを行政に持ち込まれても、自分達で解決してくださいというしかないんですけどね。

笑い話ですが、環境課にいたときに、新しい家を建てた人が苦情を言いにきました。何を言いに来たかと思ったら、「カエルの音がうるさい」と。そんなのどうしようもないですね。それなのに、行政の職員が「そうですか」と言って出かけていったのが、またおかしい。このようなことが実際に起きるわけです。ある意味では、慣れていない土地に集まって住むという、慣れていない人ばかりのマイナスの面が出てきたのか、よくわかりません。これは考えてくださいというしかありません。

「行政参加」があってもいい

水俣を「日本環境首都コンテスト」でトップの評価まで押し上げるきっかけになったのは、環境の取り組みです。そのとき私が考えた行政、住民、事業者の関係。これは急いで作ったから、ちょっと図がおかしいけれども、「行政」と「住民」と「事業者」、そして真ん中に「NPO、NGO」とか「専門家」がいるんですね。これらの関係にすべて矢印が双方向にあり、すべて参加であるというようにとってください。この概念は私は重要だと思うし、私はこれでやってきました。

水俣の取り組みで重要なのは行政参加な

んです。住民参加じゃないんです。住民参加があれば、行政参加だってあっていいだろうというのが私の考え方です。

前の前の市長の吉井正澄（よしい・まさずみ）という名市長がいらっしゃいました。その人も私と同じ考え方で、役所の仕事の半分は住民や住民活動のサポーターの役割だと言っていました。私が洗脳したんですけども、そうだと思うんですね。自分中心に考えるのはよそう、という話です。お互いが中心だろうと。そうしたら矢印が双方向になるのは当たり前。だから、事業者もそうです。住民だけではなく、事業者も参加しているんじゃないか。意外とこの図形（関係性）を明確に持っていないなという取り組みが見受けられます。

町づくりとか地域づくりというのは、この4つがどういう関わりでやるかなんですね。行政だけではないです。行政主導あり、住民主導あり、あるところでは企業とかそういうのが主導するとか、あるところでは自治会が主導していくとか、違いはあると思いますが、4つのセクターというか主体というか、その4つの絡まり具合が独特の地域づくり、町づくりだと思います。

でも、とても困ってしまっているところは、行政主導型にならざるを得ません。水俣がそうでした。九州でいえば、南小国（熊本県阿蘇郡南小国町）は民主導ですね。皆さんもご存じのように黒川温泉とかありますよね。黒川温泉は、住民主導型の地域づくり、地域おこしの事例です。隣町の小国、これは行政指導型ですね。

これは事情が違うんです。どちらがいいとか悪いとか関係なく、その地域がどういう状況に置かれているかで決まってきます。ただし行政主導であっても、あとでは住民との協

働型に変わっていくでしょう。住民主導でも、いくらなんでも行政を敵視しては、将来のいい地域づくりは無理でしょう。やっぱり協働型に変わっていくだろうと思います。矢印が重なった瞬間にコラボレーション、協働が起こるんだろうと思います。これを頭に入れておいてください。

対立のエネルギーを 再生のエネルギーに変える

具体的にどうやったか、お伝えしたい。だいたい6つに分かれます。「水俣病の受難者に学びました」ということですね。これは私が役人だったから言えたんでしょうけど。水俣というのはすさまじい行政不信でありまして、役人が入っていくと、「来るな」と言っていて、患者が玄関で追い払うんですね。私も20年間会えませんでした。20年後にやっと会えて、それから水俣づくりのスタートなんです。結果的にこの水俣を再生していったのは、患者に学んだ、地元で学んだという意味ですね。そういう「地元学」があったんだということをお伝えしたい。

それから事例として、“村丸ごと生活博物館”という取り組みをしましたので紹介します。他の事例も紹介します。逆に地元の人は何か、というまとめみたいなことをやっていきたいと思います。

この人は亡くなりましたけど、漁師の網元の一人娘だった杉本栄子です。漁師です。1992年の2月だったか、私が初めて会ったときに、「役所の者です」と言ったら、「薬草の話か?」と言われましたね。この人たちは当時、薬草、薬の草に凝っていましたから、薬草の話でなくて役所の話と言うと、驚いて「帰れ」と言いましたけど、私はもう玄関の

中に入っていましたから、「仕方がない。上がれ」って、怒られましたよ。「食べる」と言って出してくれたシャコを食いました。ずっとずっと経験したこと、凄まじい仕打ちを受けたことを聞きました。

その中で、いろいろ教えてくれました。あまりにもひどい経験を語られたので、私は声が出なくなったというのが現実です。そのとき私は、環境から水俣を再生しようと思うと言いました。「俺は農村に生まれたから、山村漁村のことは少しわかるけど町のことはわからん、町の人のが持ちはよくわからん」と言ったら、この杉本栄子は「あんたは何者か?」と言うんです。私は「山ももんたい」と答えた。すると、「山の者と海の者がつながれば町はどうかなる」と教えてくれた。これがはじまりです。

私がつながり、私の家がつながり、私の友だち、山の方でというか、無農薬の紅茶で全国の生産量の半分を作っている天野と松本という家族がつながってきました。そして、林業をやっている市長である吉井正澄という市長とつながっていった。海と山がつながっていったのが、水俣の再生なんです。

この人が教えてくれた話です。「あまりにもひどい仕打ちにあったから仕返しをしたい」と言ったら、第1次裁判のときに亡くなったお父さんが、「いじめ返しはするな。網元は木を大切に、水を大事にして、いじめた人でも好きになれ」と教えてくれたんですね。

この人はうちのおふくろです。うちのおふくろは患者の悪口を言っていた。でも、言わなくなったのは、私が私の家でこの二人を会わせたからです。二人を会わせると、一切悪口を言わなくなったという経験を持っています。

距離を近づけて話し合っ、対立のエネルギーを水俣を作るエネルギーに変えていく、そのためにはお互いの違いを認め合うという、これが水俣を作るもうひとつの原則です。それを応用していきました。

この「父の言う、いじめた人でも好きになれるというのを守るのは難しかったけど、いじめた人はそのまま変えられないから、自分が変わる」と教えてくれた。とてもとても私にはできませんね。

自分たちで調べて、変えて、役立てる

吉井市長の話をして。どちらかという患者2人は革新で、吉井正澄は自民党です。しかし、革新だと目されていたこの2人が吉井正澄さんを選挙のときに支持して、900票差で通ったんです。この吉井さんを通すために、この杉本栄子、杉本雄（たけし）が450人連れて、吉井さんを応援したら、900票差になるんですよ。このふたりが当選させたようなものです。まったく相反する自民党を応援したものだから、このふたりは革新系の人から相当いろいろ言われましたよ。それでも、やりとげてやったんですからね。

二人は、船を新しく作ったときに、「吉井さん、あんたも乗ってください」と言うんです。実は私はここにいます。これはなかなかの写真で、思い出深い。吉井市長も変わりましたけど、水俣も変わりました。

皆さんは想像もつかないでしょうね。水俣の人が大阪、京都、名古屋、東京とかに行ったら就職はできない。結婚もできない。結婚式の前の日、今ならまだ間に合う、別れろ、というのがいっぱいありましたよ。修学旅行で京都とか行っても、布団は消毒せなあかんからとか言われ、子どもたちは泣いて帰りま

したよ。昔の話ではないですよ。知らないとは怖いことです。

また、水俣という名前で、農産物は売れないという40年を過ごしました。私たちはそこから這い上がってきたんです。

水俣病の原因物質である有機水銀というのは、なんだかんだ言っても、塩化ビニルをやわらかくするものと、塩化ビニルの2つですね。したがって、皆さんの暮らしを豊かにするものをチツソがつくったのです。みなさんの家の中には、必ずチツソが作ったものがあります。ないとは言わせませんよ。だからといって、皆さんを責めません。私達も使っていますから。問われているのは俺達だと、私は言いました。問われているのは水俣だろう。世間に嫌な目にあった水俣だけど、世間は変えられないから、俺達水俣が変わろうと呼びかけました。そこには、世間というものを頼り過ぎずに、自分たちのことは、自分たちでやっていくために、変えていくために、足元を調べて、調べたことを生活づくり、ものづくり、地域づくりに役立てていくという、この地元学があった。そういうことなんです。

すべてに祈りを捧げて

患者にいろいろ学んだことはありますが、熊本大学医学部の原田正純さんという方が泣きながら言うんです。「俺たちには、あんたたちの身体は治せん」って。杉本栄子は言うんですよ。「わかった。大学の医学部の先生でも直せんなら、自分で治す。食べものになった病気は食べもので治す」ということで、薬の草をとりに行きました。このころに私は出会ったんです。だけど、あるときから、薬草から三度の食事を薬にするという薬食

に替えていきました。それは、水俣の土になるために健康な身体で死んでいきたかった、そういう願いです。自分の身体を考えて、添加物は使わない。自分は漁師でイリコを作っている。そのイリコも安心、安全に食べてもらいたい。だから薬は使わない。

皆さん、イリコに薬が使われているというのはご存知ないんじゃないかな。酸化防止剤です。イリコの見分け方は曲がっている、目がある、尾がある。これで見分けてください。本当においしいイリコをこのふたりは作っています。これを最初に食べたときは、本当においしくて、涙が出てきました。この釜揚げシロコを、熱いごはんにかけて、ワサビをちょっと、お茶をかけて、醤油かけて食べるんですよ。本当においしいんですよ。

そして、祈るということをやっていました。この人の身体は、正座したあとの痺れが全身に続いていて、1日に1回鋭い痛みが襲ってくる身体でありました。だけど、痛いということはどういうことか、生きている証拠だと、自分に言い聞かせていました。子どもが小さいころ、「お母ちゃん」と言ってその身体に触ると、痛みが取れないので1時間も2時間もうずくまって子どもを抱かずにきた身体です。子どもは周りをウロウロするばかりです。子どもを抱いたことがない、そんな感じでしたね。そういう身体でした。チッソを恨むだろうと思ったら、「許す」と言っていますね。全部許す。憎めば自分が辛い。祈らずには今日を生きていけない。自分たちの魂が生きていけない。人の罪に祈り、わが身の罪に対して祈り、人の分まで祈って、私をこんな身体にしたチッソの人まで、助かるようにと祈る。そうせんと自分たちも助からん。こういう心境になっていった。私にはできませんね。

第1次裁判の最初に亡くなったお父さんの遺言です。「裁判というものがある。おれが悪いのか、それともそうじゃないのか。世の中には裁判というのがあるらしい。栄子、裁判というものをやって、決着つけてくれ」。それで、裁判をやったんですが、それまでもいじめられていたんですが、裁判をするようになったら、今度は口だけじゃないいじめが始まっていったと聞きました。そのときのこの人の顔がありますが、とてもつらい顔です。

こういう顔つきになるまで、人はいじめるのかな、と思いました。でも、お父さんはそういう、いじめた人でも好きになれました。また、知らないのは罪（これは役人に多いですけどね）。知ったかぶりはもっと罪（学者に多いですけどね）。嘘つくのはもっと罪（政治家に多いですけどね）とも言っていました。

最後の武士との出会い

このふたりを陸前高田（岩手県）の河野さんの家族に連れて行きました。河野さんはちょうど心臓病で入院していたんですが、奥さんとじいちゃん、この人も亡くなりましたね。河野通義だったかな、この人は最後の武士でしたね。陸前高田の広田湾の埋め立てを本当に止めた男です。

長男の河野和義が二十歳過ぎの頃、一升瓶のお酒を2本ドンと据えて、「この店はつぶす」と、「今日から埋め立ての反対運動をやる、不買運動でうちの店はつぶれるかもしれない、だけどこの店は俺が作った店だ。お前らはどうにかして食っていけ」というのを、一晩語り合ってやり遂げた男です。

「なんで、お父さんそんなことをそこまで

してやるの？」と息子は聞いたそうですが、「孫が大きくなって、『何でじいちゃん何もしてくれなかったの』と言われるのが嫌だ」と。それでやったんですね。結果的に本当に止まった。石油コンビナートと火力発電。それをふたつとも止めましたね。だけど、止まったら今度は「漁民の皆さんが頑張ったからだ」と手柄をそっちにやって、自分はスーッと引いていきました。私は最後の武士だと思っています。あと一人います。あとで紹介する、綾町（宮崎県）の郷田実さん。最後の武士のふたりに私は会ったような気がします。そういう意味で私は幸せでした。

この埋め立ての反対闘争をやるときに、広田湾を多くの漁船が大漁旗で反対の行進を行っているんです。そのときに先頭を切ってやったのが、畠山重篤です。この人は「森は海の恋人」と漁師が山に木を植える運動で有名になった男ですね。東京からそれをわざわざ見に行ったこの河野さんの娘さんの香代さんは「人生の中で身体が震えるほど感動するときってあるんですね」という表現をしていました。すごい感動だったんですね。

お手本は綾町の森の保全

郷田さんは二千町歩の森を守った元町長です。夜逃げの町だった綾町を見事に再生した人です。水俣のお手本なんです。私はよく遊びに行っていました。飲みに行っていました。薫陶を受けたわけです。教えをあんまり受けた覚えはないのですが、飲んでいろいろ話が出てきましてね。可愛がられました。この人は娘が1人しかいません。「水俣の息子」というように可愛がられました。何で私をかってくれたか。こういうふうに言いましたよ。「お前はよく遊ぶ」と。「その遊ぶ

のを許している市長はまた偉い」と訳がわからなかったですけどね。

だけど、この人は偉いと思いましたね。遊びがわかる男でしたね。

この綾町のまちづくり、たとえば日本で初めて有機農業や、自然生態系農業や、し尿を全部液肥にして畑に戻すという循環型の農業や、照葉樹林はもちろんいちばん最初に守りました。それから、そこに東洋一高い橋を架けたりしていました。これは全部、議会は反対です。押し切ってやったんですね。

何で押し切ってやったか、やれたのかという話をしますと、この人は戦争で中国からマレーシアまで行って、オランダ語はできたんですけど、英語を勉強して通訳になって、1年遅れて帰ってきたんですね。中国からマレーシアまで行く間に、戦友から何度、死のうと誘われたか。一緒に死のうと。一緒に固まって、手榴弾をピッと抱えるようにしていれば死ぬわけですから。何度も何度も誘われた。病気で死ぬのは3分の1、弾に当たって死ぬのが3分の1、あとの3分の1は自殺だった。そういうような言い方をしてましたね。

俺も誘われたけど、故郷の綾町の川で遊んでいる風景が目に見えてきた。祭りの太鼓の音が聞こえてきた。帰ろうと思った。だから、この人は帰っているいろいろあったけど、町長になって、そのときに華々しく花火を上げるのです。財政が逼迫しているときに。「いやー、やらなあかん。故郷が思い出の場所でない駄目だ、そのためにやる」。いろんなことを言っていましたけど、そのときに、森を切るという営林署の動きに反対をしました。反対の理由はわからない。だけど、「いや、とにかく駄目だ」。それから勉強したんですね。片目が見えなくなるほど、毎晩本を借り

てきて読んでるんですね。それで、森ってこういうものか、土はこうしてできるのか、そうか鳥がフンをしてこうなるのか、木が倒れてこうなるのか、なるほどなるほど、と勉強していく。

結果的に森を保全するというのは、川のきれいな水、飲める水の保全で、水を支えるのは森だ、土地を支えるのは、作るのは森だ、と気づいていく。だけど、木を切ることで村の人、町人は生計を立ててましたので、そこで「切るな」と言ったものですから、大変です。日本刀を持って、家に押しかけるんです。「なんだ、お前は町長」と、石で家のガラスを全部割られるんです。でも、この方の奥さんが郷田チサという小柄な女性で、日本刀を持って押しかけられると、「あなたは座敷にいなさい」と玄関に行って、ピシッと正座して「なんですか、それは。卑怯じゃないですか」と言って追い返すんです。強いですよ、九州のおなごは。

杉本栄子とその家族

この杉本栄子、いい森があるから、魚がいるんだ。だから、森を大事にした郷田さんと会いたかったんです。私の家で会いました。このときに、うちのおふくろが入ってくるんです、話の輪の中に。おふくろは初めて会ふんです、患者と。それからです、うちのおふくろが悪口を言わなくなったのは。だから、距離を近づけ、対立から創造へ、違いを認めあうというのは、1992年に私の経験から生まれた言葉で、それを応用していきました。

木を大事にするということですね。水を大事にしていたら、水俣病は起きなかったな、私たちの命を支えるのは水だ、そんなことを言っていました。そして、家族づくりが大切。

家族を作ると子どもが支えてくれる、これはどういうことか、これは自殺せずに済んだということです。子どもが支えてくれたんです。幼い子どもたちは小学生ですが、漁師になりましたよ。朝4時半に起きて、海に出るから、学校に行っていました。大変です。長男の肇は、小学校5年、6年の頃ですが、親代わりで家を支えて、幼い子ども4人、弟です。支えて親代わりになっていったんです。そのとき、家には誰もいないですよ。そういう状況で、本当に踏ん張ったのが、この杉本肇です。しかし、水俣病の裁判で勝ったら、お金が来ました。お金が来たら、「肇、もうお前は頑張らんでいい」と言われて、肇はグレていくんですね。グレて、親の言うことを聞かなくなって、家を飛び出て、一時、東京で仕事していました。10年前に帰ってきましたけどね。

入院していたら、子どもが痩せたので、びっくりして帰ってきた、と言っていましたね。家には子どもたちばかりだったから、水俣病を支援する人たちが家に入ってきて、頑張ったんですよ。支援者が家に入って、「俺の言うことをきかないと飯を食わせない」と言って、子どもは山の草むらの中に入って隠れていました。だから、痩せてきて、親は入院どころではないと帰ってきた。支援する方は引き取ってもらって、もうよそ者は入れないということになってきました。子どもが言うんです。「母ちゃん、家は売ったのか？ よその人がおる。母ちゃん、長生きせねばつまらん。長生きするために、おらんばつまらん。チツソに負けるぞ、笑え。母ちゃん、笑え。うちが踊ってみせよか」。こういう、子どもたちが育っていったんです。今はこのように大きくなっています。

親子で漁をしています。しかし、水俣病の

おかげで、人にも魚にもよく出会ったと言っていましたね。それまでは、急いで、いっぱい魚を捕ろうと思った。だけど、身体がこういう身体になって、スローな暮らし、ゆっくりした暮らしになっていったら、人にも魚にもよく出会うと言っていました。晩年は水俣病は私の守り神だという心境に達していきました。

これはおふたりが、結婚する前に登った、矢筈という山の神があるところです。山が神様というのは、漁師は瀬をあてるのに、山と海辺の石とか岩とか木とかで、瀬を当てて行くんです。漁場を。だから山を大切にします。その山に若いとき、ふたりで登ったと言っていました。そして、帰ってきて日給300円のとき、280円くらいかな、それくらいのブローチを買ってやった、そのとき渡した。そのときがファーストキスだったと言っていましたね。入院したときに、その栄子さんはブローチを持っていった。50年持っていた。はたちから。69で亡くなりましたから。最後の入院のときも持っていたんです。

復活への姿—受難に生きる

私が辛かったのは、杉本栄子が一昨年亡くなったのですが、その前の年に私、呼ばれたんです。「私はあと1年の命だ。泣きたい。泣きたいけど、私が泣くと子どもたちが泣くから泣かん」と言った。私も辛かったですね。1週間ほど、仕事ができなくなりました。平成20(2008)年の2月28日に亡くなりました。長男の肇が、挨拶してくれましたね。みんなこらえていましたが、肇の挨拶でみんな泣きましたね。

「母は病気だったけど、家族のためにしっかり生きてきました。一生懸命、私たちを育

ててくれました。ありがたかった。病気の身体で、5人を育てるのは並大抵のことではなかったと思います。最後の砦が家族ということを知ってくれた。母は前へ前へ仕事をしよう、何をしよう、これをしよう、身体は不自由だったけど、人に自分の経験を語ってきました」。葬儀には1000人が駆けつけ、「あなたのお母さんのおかげで勇気をいただきました」と、たくさんそんな言葉を皆さんからいただきました。最後に、「母ちゃん見とるかい、今日は大漁じゃったぞ」と言いました。

おそらく生きていれば、この杉本栄子は「大事なことは残された命だ、出会いと命だ、ありがとたい。みんな生きとつとば、大事にせんば」と言うでしょうね。これは私が勝手に書きましたけど、おそらくこう言うでしょうね。

言いたいことは、この受難の杉本栄子と、その家族には復活に生きる姿があったということです。受難があったけど、復活があった。私はそれを水俣づくりに翻訳したということです。一つの物語ですが、私はそれをたったひとつとは思わない。全部なんです、全体。一即全という考え方を持っています。

問題のつくり直しからはじめた

ひとつ、私たちは足元は小さいと思っていたけれど、そこには大きな世界がある。私たちは小さいと思って捨てたのではないですかね。国も県も地方も同じ、対等な関係でしょう。国は県より偉い、大きい、強いとか、県は市町村より大きい、強い、偉いとか、誰が決めたか知らんけど、そんなことないですよ。

国の役人が県に出向して、課長クラスが副

知事クラスとか、おかしいですね、国のときが係長だった役人なら、県に出向してきたら係長で来てくださいね。なんかおかしくないですか？許している方がおかしい。

水俣の再生には、地元が加わったという、先ほどの繰り返しです。水俣は、環境都市をめざしました。これは、水俣の再生は環境から始めようというのを、私は20年、30年前から決めていました。それで、ずっと環境って何だろうと考えてきました。今は環境首都コンテストでもう3回、連続1位を取っていますが、8割、9割は私が手がけた仕事で、しかも予算ゼロが多いということをおきます。これは、お金があんまりなかったからやった結果が、よそにないことをやったということなんですよ、いいですか。だから、お金がないからできないなんて言わせません。今のあちこちの役人に、「甘えていますよ、じゃあ、俺がやってあげましょうか」と言いたくなる。何か変ですよ。自分ができないのをお金のせいにするとか、人のせいにする。なんで自分のせいにしないのかな。

水俣病の発生、数字は全然違っていますが、亡くなった人が2270人を越えています。1996年の解決策で1万353人、最高裁の判決が37人、今おそらく3万人を越える人が、新たに助けてくれと申請しています。底知れぬ広がりです。50年が過ぎても、水俣病はいぜんとして未解決の問題ということですよ。

水俣再生の大きなきっかけは当時の運輸省です。運輸省と県が中心になって、水俣の環境保全事業、公害防止事業をやりました。それがきっかけで、ヘドロを埋め立てて封じこめるという事業で水俣湾の埋立地ができていくようになると、埋め立てられていく土地に市民が夢を描き始めたんです。見えるようになったから。それがきっかけでしたね。

県は水俣振興推進室というものを特別に設置して、水俣振興にあたっていったのです。水俣市にも企画課に水俣振興推進室ができ、住民と一緒に、県市住民一体となった実行委員会でやっていきました。結果的には住民主導型ですけども、一応三位一体でやっていきました。

今はヘドロの海、悲劇の海と称された水俣湾は復元しました。驚きです。サンゴがあります、海藻があります。皆さん、嘘だと思ってしまうでしょうね。しかし、見ていただければわかりますが、これは水俣の海です。ぜひ水俣の海に来て、潜ってください。いつもの冗談を言いたいんですけど、願いがあります。潜ったら、この藻に絡まねずに帰ってきてください。これはお願いします。それほど、藻がいっぱい、魚が産卵する場が出来上がりました。嬉しいことです。

私は1991年にこの仕事に携わるようになりました。20年間都市計画課にいて、こんな役場はもう面白くないって、辞表を書いていましたけど、企画課に行って、呼ばれて、この仕事の水俣病問題の解決と水俣の再生だと聞いて、これは逃げられんなど思いました。だから、私は「逃げろな、正面から向き合え」と自分に言い聞かせて、だから会えなかった患者に会いに行った。

私がやったのは水俣病の解決や問題づくりです。これはですね、私たちは答えを間違えているのではない、問題を間違えている。うちのおふくろは患者が騒ぐから、水俣の農産物が売れないと言っていました。すると患者は騒ぐなという答えになりますね。これは答えは合っているでしょ、でも、問題が間違っているんですよ。私は問題を間違えているなと思っていました。だから問題の作り直しから始めました。

水俣病の犠牲をムダにしない再生計画を

水俣の再生は環境から始める、これは決まっています。水俣病の問題は、①患者の救済も必要です。「生きているうちに助けてくれ」という被害者がいる。②ところが、被害者である患者を助ける場合、お金を持っていないチッソを助けねばならないという矛盾が発生したんです。これは大変なことです。これは税金が使われる。それは皆さんの理解がないと使われない。これは難しい。

チッソの分社化で、事業資金と補償費用を捻出しようとしています。これは体のいい逃げですね。憲法違反の可能性になる場合が高い。非常に困った問題を内に潜めています。そうならないように、法学の先生と研究、検討するように前の吉井市長さんに頼んで研究してもらっています。結構難しい問題がいっぱいあります。

しかし、家に帰れば、生活がある。その中に③失った命と身体が元に戻らないという問題があります。慰霊とか、癒すとか、祈りとか、そういうのをやっていくということですね。それから、④私たちも役に立ちたいというのがあるんです。生きがい、働きがい、社会参加の問題。だけど、本当は存在理由の確認の問題がありますよ。どうしてこんな身体になって生まれたのか、胎生の患者。これには答えられないでしょう。わかったことがあります。解決できる問題とできない問題がある。ということは、解決できる問題は早く解決して、解決できない問題とは共存していくという覚悟が水俣にはいるんです。それがなかったら駄目です。

次に⑤水俣出身とは言えない。先ほど言いました、就職ができない、結婚はできない、農産物は売れない。そういうときどうする

か。胸を張って、水俣といえる水俣づくりをやることなんだ、これだという。しかもそれが水俣病の犠牲を無駄にしない地域づくり、水俣づくり、そういうことです。地域を作る理由がここではっきりとわかってまいりました。大体こんなことから整理してからやっていったということです。

もやい直して

壊れてしまった人の心をつなぐ

いちばん最初にやったのは患者の救済ですが、2番目にやったのはもやい直しなんです。もやい直しというのは、船をつなぐ「舳い」と、共同で仕事をするとい「催合」という2つの意味があります。平仮名の「もやい」でいうときは、壊れてしまった人の心をつないで新しい水俣づくりを一緒にやっていくということなんです。なぜ、こういうことをやる必要があったのかということですが、これはすさんだ人の気持ちのままでは、水俣の再生はおぼつかないということです。愚痴、悪口、嫌がらせの電話、怪文書が蔓延していた水俣ですよ。大変ですよ。皆さん、水俣に来てください。そういう中で生きていかないかん。自然と人は強くなりますよ、鍛えられて。おかげで私も強くなりました。そんなんで負けてられないですね。

私も3年に1回は怪文書が届いて、また市長が私のところに持ってくるんです。吉井さんが、何年前かな、西暦2000年だったかな、10年前ですね、言うんですよ。「吉本、ラブレター」、「はあ」と思ってみたら、悪口です。しかも、ご丁寧に名前は書いてないですね。しかも内容は隣に座っていないと書けない、まあ大変なもんです。

隣に座っていないと書けないというのは、

隣を疑いますが、隣はみんな私の部下です。部下を全部疑いますよ。これは大変ことになりますね。私はこれはしてはいかん、たったひとりなのに全員を疑うというのはしたらいかん。あー、可哀想にと思いましたね、こういうように書かないと生きていけないのかなと思いました。だから、ほったらかしましたね。隣に座っていて、ねじ曲げていくんですけど、しかし、俺は別に悪いことしてないからいいわと思ってやってみましたね。どんな組織でもそういうのはいますから、特にニコニコして隣に近寄ってくるのは危ないですよ。経験上、そういうことを言いますね。気をつけようかね。

旧東ドイツのビッターフェルトとハレという町があります。旧東ドイツ、ドイツ最大の、おそらく EU 最大の環境汚染都市になってしまった。そこの復元をドイツ連邦と EU がすごいお金を出して、水俣のように復元をやる。やりましたが、そこに住んでいた市民は二流市民だと蔑まされて、自信と誇りを失っていったんです。ネオナチの巣窟のようになっていったんです。しかし水俣はそうはならなかった。なぜか。もやい直しの動きがあったからです。そういうことです。意外と大事なのですよ。

次に、未来を共有して行動して、やっとな産業なんです。このステージを次々にスタートさせましたから。難しかったですね。こんなことをやりましたということです。165 項目ぐらいありますが、かなりの部分は私がやってるんです。もちろん、私一人だけでやったわけじゃありませんよ。上手くいけば、俺がやった、俺がやったと言う人がいっぱいいるんですね。そんなもんでしょ。俺がやったというのが増えるのが成功の秘訣と私は思います。

「あるものさがし」で愚痴を自治へ

行政と住民の距離を近づけるという話です。「寄り会」というのを 1991 年に地区ごとに 26 地区、約 5 ～ 10 名、200 数十人の自治的組織を作って、この人たちにお願ひしてやったというのが、水俣の再生の最初の形。これは新しい公というよりも「共」の領域を強化していこうというのが、私の考え方。役場じゃない、自治会みたいな共の領域が弱から作っていこう。これは自治の訓練です。「寄り会」を作ってやってみました。

いちばん最初に環境に関するいっせいの寄り合いですね。子どものころ遊んだ話をしてください、その場所がどうなっているか見てください。「写真を撮ってきましたか？次にどうしたらいいか考えてください」と話し合ってもらいました。遊んだ話や思い出話はみんなよくしますから。

次にあるもの探しをしました。これはどういうものか。地域にあるものを写真に撮ったり、聞いたりして、それを絵地図にしましょう。

私は最初、地域資源マップと言ったんですが、皆さんもよくやられると思うので気をつけてください。宝さがしと資源さがしは違いますよ。あるもの探しじゃないと駄目です。全国では宝さがしとっていますが、「これは宝である、それは宝でない」と分けていくだけなんです。私にとっては磨けば宝になるという意味で、すべて宝ですよ。まずあるものを探す。

なぜ、あるものさがしが必要かという、例えば地域でも企業でもお店でもいいです、地域の衰退というものは、作る力の衰退なんです。作る力の衰退は考える力の衰退なんです。考える力の衰退は調べる力の衰退なんで

す。調べてないから、考えないから、作れないですね。じゃ、なんで作らないといかんのかと言ったら、それは衰退するから。また、同じことですけども。

湯布院で「木工アトリエとき」を主宰する時松辰夫さんって方がいらっしゃいますが、この人が言ういい町とは、自然と生産と暮らしが繋がっていて、常に新しいものを作る力を持っている、それがいい町だ、いい地域だとおっしゃる。新しいものを作る力ってなんですかという話ですね。

私はこう思うんです。新しいものとは、あるものとあるものの新しい組み合わせなんです。だから「あるもの探し」が必要。ごちゃごちゃ言って、愚痴を言っている人は何も探していない。新しく組み合わせもしていない。衰退しますよ、衰退しますね。「ないものねだりをやめて、あるものさがし」と私は言っています。

ないものねだりは愚痴であります。あるものを探して磨く、これが自治ですね。愚痴を自治にどう変えるかですね。水俣は愚痴や悪口を自分たちでどうにかしようという自治に変えていったのは事実です。

水と女性が風景をつくる

あと、水に気をつける。これは環境から水俣を再生するときに調べたのが水です。これは私の家です。私の家を調べて、自分が飲んでいる水は、どこから来て、どこへいくのかなと調べたら、驚きでしたね。これに気づいたのは1991年です。もう終わりましたけども、テレビ朝日「宇宙船地球号」の番組になりました。私の家の水の行方です。ちっちゃい、たったひとつですが、大きな全体でもあるんです。村を調べても同じ、水俣全部を調

べても同じ構造である。そういうのに気付いていったのです。

あと、村の風景は水が作っていたということに気づいたりしましたね。だけど、村の風景の多くは、7割ぐらいは女の人を作っていることも聞きました。特に東北です。農村にお嫁入りした女の方は、厳しい暮らしに何度泣いて帰ろうと思ったことか。だけど、子どもができると、ここに住むと腹を決めて、実家から思い出の柿とか、栗とか、梅とか植えて、子どもの将来のために暮らしを整えてきた。これが風景だとおっしゃるんですね。ああ、いい話だと思いましたね。私も自分の家を調べてみました。柿や、梅やザボンとかいっぱいありますが、誰が植えたのか調べたら、うちの親父が植えていました。だけど、うちのおふくろが植えると命令していました。まあ、いろいろあるなと思いましたけど。

ゴミの分別運動からエコショップ認定へ

市も結構頑張っていたんです。俺もいろいろ頑張ったんだけど。これは私はしませんでしたけど、ゴミの分別ですね。これはゴミを減らす女性会議で、この人たちがお店に行って、このトレイは要らないというリストを作ってお店と談判していくんです。食品トレイの廃止の協定を結んでいったんです。水俣病センター相思社、この人は婦人会連絡協議会、要するに右翼と左翼ですね、会ったことがない人ですね。会わせました。私がさっき言いましたね、対立から創造へ。だから喧嘩はするな、お互いの違いを認め合う、そういうことでこのおふたりを近づけて、話し合っていて、自己主張は自分のところの押し付け合いをするなど両方に言ってやりましたけど、結果的にはすごい力をこの女性会議は発揮し

ていったんです。

吉井さんのあとは土建型の全国一若い市長になったんですけど、九州最大の産廃処分場に積極的に反対しなかったもんだから、市民が怒ったんです。選挙では新しい市長をつくる力になりました。

これです。市長と議長が間に立って、16人の人たちが会議ですから代表はいないんです、代表を作らない。全員が代表だと。お店が4軒、大型店が2つ、中型店が2つ、その4軒とまず結ぶ、今は10何店舗に広がっていますが、この人たちが16人、いいですか、印鑑は16足す4足す22個を押すんですよ。調印式で印鑑押し、1時間かかったのは初めてですね。76品目についてトレイの廃止の協定をしていきました。

次にそういういい店は褒めようと、エコショップ認定をしました。不買運動の逆をやりました。そういういいところで買いましょうという運動ですね。いい店づくりをやっているっていうのを褒めようという、認定制度を作ってきました。これは市と顧問、女の人たちと一緒に作って、女の人たちが認定するというしくみです。

ルールは自分たちで考えればいい

次に地区環境協定。自分たちが住んでいる地区の環境は、自分たちで守る。これも私がおそらく全国ではじめて作った制度です。なぜこんなことをやったかといったら、ヤクザが庭石を村に取りに来ていました。村の人は嫌だ、思い出の石が盗られていく、やめてくれと言ったら、ヤクザが「若い者をやるぞ」と脅すんです。困ってしまって警察に行くと、警察はどうしようもない。県庁に言ってもどうしようもない。土木事務所に行っても

どうしようもない。市役所に言ってもどうしようもない。私にも聞かれましたけど、俺にもわからない。

だけど考えました。新しくルールを作ればいいと。この村では、村の合意を除いて、沢から石をとるのは原則として禁止すると。要するに村の人が全部印鑑押しして、役場と結ぶんじゃないですよ、自分たちで押すんです。見事に止まりました。ヤクザにたった2万円で石を売っていたのは村の人なんです。立派な経済行為です。だけど、それはしてはいけないというルールは誰もなかった。共有してないからルールでもないんですよ。じゃルールにすればいい、そういう発想です。これは全国にない。モラルに頼っていて、モラルは簡単に破っても、罰則も何もないですね。共有のルールにしないと。

環境マイスターですね、環境と健康に配慮した、優れたものづくりをやっている人に称号を与える、これは私の造語です。無農薬で作るなんて変わり者と言われていました。私はそれは違うと思いました。褒めようと思って、実はこの人達は水俣という名前で、全国で売るようになっていった。このうちのふたり、松本和也と天野は、全国の国産紅茶の半分を作っていますが、この松本はドイツとロンドンで取引開始です。そこまできました。嬉しいですよ。結構長くかかりました。20年以上かかりました。

これはISO14001。私は取ろうと思いましたが、当時、市役所で取得しているところはどこにもなかったんです。全国で5番目になりましたが、1999年2月23日に取得しました。

2003年の10月には、グローバルスタンダードはやめて、俺たちは俺たちで自己宣言する、市民の監査を受けるという方針に変えま

した。相談には乗りましたが私はしませんでしたね、そういう戦略です。これは市民に広がって、学校版環境ISOなどに広がっていきました。学校の環境ISOは水俣の小中学校16で全部やるようになったんですが、熊本県の小中学校全部やるようになりましたね。それから鹿児島県もやるようになりました。滋賀県でもやっているようですね。これは全国に広がっていきました。これは予算ゼロだから、簡単にできる。これはよかったですね。

「地元学」が水俣を変えた

おかげで水俣のイメージはずいぶん変わりました。ここ10数年。皆さんも水俣のが変わってきたこと、少し聞かれたかもしれませんね。すさまじいマイナスのイメージから、のたうち回りながら這い上がってきたこと、しかし、そこにはお金がなかったから、お金をかけずに汗をかいて、知恵を振り絞ってやってきた、そういうことでしょう。そんなことが役所だけでできるわけがない。市民と一緒にやったってことです。

特徴は、①みんなで調べてやった。なぜかという調べた人しか詳しくならないからです。水俣病で学者、研究者、いっぱい来ましたよ。しかし、住んでいる私たちは詳しくならなかった。

私はわかった。調べた人しか詳しくならない。私は呼びかけた。自分たちで調べよう。だから水俣のやり方は下手です。学者が、皆さんが調べるような緻密なものではない。だけど、調べた分だけ、詳しくなったんです。その分だけ、グイグイ前に着実に伸びていったのが水俣です。下手です。だけど、自分たちが調べたというのは強いと思いますよ。そ

れがないところは、いつまでたっても、伸びないですね、調べないと。

②は安い、補助事業などには頼り過ぎていない、③個性を把握した、④過去に学んだ、⑤自然に学んだしくみを導入した。それから⑥誰がどのように何をということをはっきりさせた。それから、⑦水、ゴミ、食べ物に気をつけている。

振り返ってみれば「地元学」だったという、そういう特徴があるとそう思ってください。

村丸ごと生活博物館

一村人が学芸員一

これは、村丸ごと生活博物館。これも予算ゼロです。源流の村45世帯の村を元気にした事例です。頭石（かぐめいし）というところで、用事のある人や親戚しか行かなかった、水俣の人もここには行かなかったところですが、今は水俣でいちばん有名な場所になりました。どこにでもある源流の村でしたが、どこにもない取り組みをやったという成果ですね。

8人の生活学芸員、15人の生活職人がいます。生活学芸員、生活職人の条件、それはここには何にもない、言わない。そのためには、自分の家にあるもの、村にあるものを写真に撮って、地図にしていこうということをやってもらいます。私たちが手伝いますけどね。作った地図で生活を調べる。これで案内するんですよ、それで案内するときに1人あたり1000円もらう。だけど大事なことがある。それは、昼飯にかかるように案内する。1500円もらう。これが大事です。しかし、売り上げの1割を村に返して、共有財産にしていってというのがこの取り組みの大きな特徴です。15名と8名の人しかお金が入ってこ

ないと、お金がこない人からは文句が出る。文句が出ないように村に返していったということです。これは偉い。そんなことする必要はないだろうと考える人は村では生きていけないでしょう。

効果は自分たちの生活が豊かだと気づいた。案内が面白い。たくさんの人が訪れてきて、修学旅行がやってきた。これは神奈川の女子高生。

起きたことは、村のじいちゃんたちも張り切りだした。農家民泊もつくられた。家庭料理が当たり前においしい。直売もちょっとだけやるようになりました。村の人、特にばあちゃんが元気になっていきました。村が化粧しはじめた。学生が来て、地図を作って送ってくれる、これも嬉しい。意外とものづくりが進んだ。加工所ができて弁当を作る。そういうことが起きています。

あっという間に農林水産省村づくり部門とか、大臣賞とかをもらうようになりました。おもしろかったですね。農林水産省の「立ち上がる農山漁村」をもらったのは笑いましたね。「立ち上がる農山漁村」というのはご存知ですか。農林水産省が認定、紹介するんですけども、この立ち上がってしまっちゃった農村漁村は、農林水産省の補助事業は一切入っていません。そういうところは元気がいいんですね。皮肉なものです。

この小嶋待子さんは「30年前からこうなればいいと思っていた」、小嶋利春さん「今まで台所に立つのも、洗濯物を取り入れるのも恥ずかしかったけど、今は恥ずかしくないよ。今までは道に落ちている缶とか拾うのは、恥ずかしかったよ。だけど今は拾わないと恥ずかしくなったよ」と。私はこういう話に感動いたします。

この小嶋さんのところで、頭石の館長役の

3人で飲みました。この話を聞いて私は深く感動いたしました。館長役の勝目豊という人は笑いながら言うんです。「吉本さん、いろいろあったよ。看板、自分たちで作ったなあ。村丸ごと生活博物館、頭石に作って、あの中にゴミがぶちまけられてたなあ、黙って拾ったよ。1回2回じゃなかったぞ」。えーっと思いました。「恐らくあの人だろうとわかっていて。だけど、農林水産大臣省をもらったからその人が握手しにきたぞ」と。泣き笑いですわ。

「みんな」ではなく「自分たち」

予算ゼロで、こういう素晴らしい取り組みをやるようになった、ということです。10世帯の20人のところが元気になった。これは、新しい「公」もしくは「共」ですね。そういうところとどう関係するのですが、私がゆさぶるのはこの村には素晴らしいものがたくさんあるので、みんなで話し合っただけでやる気を起こす、その素案や資料、素材にしてくれというしくみです。

三重県の大紀町の野原地区もいろいろやるようになった。地区の自治会の人たちが私たちを呼んだのですが、「結果的にこういう困った村は、女の人を走らせてから、男はあとからついていけ」と言ったら真に受けて、女の人が動き出して素晴らしい取り組みになりました。玉木という男がいますから行ってください。京都からだったら近いと思うから。素晴らしいですよ。

ほかには、三重県大台町浦谷です。西出という男がいますから、このふたりを訪ねていただければ。このふたりとその住民は素晴らしいです。これは、自分たちがやったんです。私たちは引き出しただけです。

「自分たちで」という、これが自治ですから、自分たちでやる力を身につけるのが地元学なんです。自分じゃない、「自分たち」なんです。「みんな」という言葉はおかしいんですよ。よく考えてください。よくお話があるでしょ、私は水俣で話し合っ、青年会の人が言うんですよ。私たちは、ここに住んでいる、ここに話にきている、私たちはわかっているけど、みんなはわからん。だから、よくないと言うんですね。私は腹立ちましたね。「あんたが言う、みんなというのは自分たち、及び自分を入れてないねえ」。ここ以外のみんなをみんなと言う。みんなと言うのは、自分を入れていないから、おかしな言葉です。自分たちとかそういうように言わないと。みんなというのは、怖いなあと思いましたね。自分たちという、使い方での「共」の領域を新しい「公」だろうと思いますが、こういう訓練をし、強くしていくことが必要だと私は思いますね。

「土」の人と「風」の人と友だちの力

—楽しく地域で生きる—

では、地元学とは何でしょうか。土の地元学、風の地元学があります。住んでいる人がやる地元学、外の人と一緒にやる地元学。主役は土の人です。しかし、住んでいる人では気づかないものがあります、地域の持っている力は。やっぱりこれは外の客観的な評価が必要だろうと思います。外の人と一緒にやってくださいとなります。そうしないと地域の力、人の持っている力は開けないですね。何がどこに問題があるのか、公的領域、共的領域、私的領域のどこに問題がどうあるか、これは結構わからないものなんです。自分たちだけでやると1人よがりになってしまう。

それはまた辛い。ということはどういうことか。1人よがりにならないために、一緒にやってください。だけど、外の人には行儀作法がある。「問題点を教えないでください」、これは大事です。教育という言葉がありますが、英語でeducation、ラテン語でエドカーレという、ここから生まれています。エドカーレというのは引き出すという意味です。いつから「教える」に変わったのか。技術とかは教えないといけないでしょうが、人に関しては引き出すでしょうねと私は思います。そういうように風と土の共同作業は非常に大事だろうと私は思います。もっと言うと、住んでいる自分が外に出かけて行って、外から自分の住んでいるところが見れるようになる、自分が風になるということもあるでしょうね。いろいろあると思いますが。

さっきの3つの元気を作るという話です。人が元気で、自然が元気で、経済が元気な町や村をつくる3つの経済を整えます。貨幣経済、共同する経済、自給自足の経済です。いい地域、いい町、これは10の条件があると思います。これはいい自然がある、いい仕事がある、海仕事、畑仕事、山仕事ですね。いい習慣がある、助け合っているとか、結（ゆい）とか。住んでいて気持ちがいい。学びの場がある生活技術の学びの場です。家庭料理、野菜づくりなど、生きるために必要な手わざ、知恵ですね。地域をよくするための交流あたりも学びの場でいいでしょうね。

それから、3人の友だちがいる。これが大事ですね。ある村で教えてくれたんですけど、喧嘩はしたけど、いい友だちができたよとばあさんが言う。旦那さんを亡くされて、3人残されたばあちゃんたちが、誰が先に弱っても、寝たきりになっても、看病すると約束したら、ほっとしたって言う。喧嘩したけ

ど、いい友だちができたよ。町に出た息子が帰ってこい、町に来い、と言っているけど、今さら町に行っても友だちはできるかね、できないよ。食べものが合わないね、水が合わないね、と言う。それからいい自治があるということですね。それから、やっぱり地域や家族を担う人が育っている、これも入れておきましょう。それから地域が大好きであることですね。村や町が。それからおいしい家庭料理がある。それから、地域の暮らしを楽しんでいる。大事でしょうね。地域の暮らしを楽しんでいないと、子どもが残らないですよ。理屈ばかりで住めるはずがない、という話ですね。楽しむって何か。人生でしょう。今でしょう。楽しんで話をしたり、おしゃべりをしたり、ものを作ったり、野菜を作ったり、何でもいいんじゃないですか。それが楽しみにならないと。苦しみになったら、駄目ですよ。本当は楽しいんです。それが大事だと思います。

問題解決型というより 価値創造型の地域づくりを

地域が持っている力、人が持っている力を引き出す、先ほど言いました。対象は町とか、村とか、施設、学校、企業、店、商店街、農林、漁業、結構ありますよ。これは決して村だけではないということです。商店街も対象になります。商店街は結構ややこしいですよ。皆さんもやるときは気をつけてやってください。私も経験上、気をつけています。なぜかという、町の商店街ほど政治的対立がさかんなところはない。やりにくいです。

施設の地元学で有名なのは、旭川の旭山動物園でしょう。働いている人が、コンサルタントに頼らずに自分たちの力で、行動展示を

していきましたね。あの人たちは地元学と言っていないけれど、私から見れば立派な地元学なんです。偉い、よくやったと思いますね。先ほど言った、“ないものねだりはやめて、あるものさがし”とか。社会起業家を育てる、もしくは自分を育てるということですね。社会起業家というのは何か、困った問題を創造的に解決する、これが今学生にいちばん人気のある仕事像というか、職業というか、今アメリカではそのようになっています。

具体的には、カナダのある荒れた小学校を立て直すために、町が社会起業家の女性を派遣した。荒れた学校に赤ちゃんを連れて行って生徒に抱かせた。次に赤ちゃんがどう動くか、推定、推測させた。これで荒れが激減したそうです。これが創造的に解決するということですね。こういう知恵です。水俣も金をかけずにやったんだから、ひょっとしたら社会起業家的にやったのかもかもしれません。

それからこれだけは言わせてもらいます。今は問題解決型の地域づくりではなくて、価値創造型の地域づくりになっていると思います。価値を作っていく。問題を解決すると次の問題が生まれるだけです。価値創造型の地域づくりに変わっていると。公と共と私、このコラボレーションは何のためかというのを考えていかないと。問題解決型でないはずですね。価値創造型の、私に言わせるとおいしい水俣、いい水俣づくり、そうするための価値を作っていく。それに公と共と私と一緒につながってやるという、そういうことじゃないかと思います。

あと一つ、私があちこちで見て回って、全国にないな、おかしいなと思うのが、地域固有のそれぞれの思想、哲学、美学がどこにもないということです。京都にもないのではありませんか。そうじゃないと、どれとは言い

ませんが、あんな建物はできないでしょう。もし、あれを許すというのが思想だとしたら、そうじゃないでしょうね。大事なことを共有するというのが思想でしょう。京都だけじゃなく、全国でおかしい。

公と共と私。新たな公とか、ちょっと難しい概念から入り過ぎましたけど、新たな公じゃなくて、共だろうと私は思うということで、私なりに解釈して、実の水俣の取り組みというのは、共の領域の取り組みの強化、充実だったということがわかっていただけたんじゃないかと思います。

「一点突破、全面展開」と40点主義

—行動しながら考えよう—

今、私は私が住んでいるところの6つの自治会が集まった連絡協議会の顧問というものをやるようになりました。私は「顧問になっていいですが、そのかわり、条件がある」と言いました。ひとつは勉強してもらおう、自分たちのところのことを知ってもらおう。そうじゃないと受けない。それから、学校合併の反対運動が起きているんですが、もうやめろと。反対運動じゃなくて、学校が合併するぐらい子どもが少なくなったんだから、子どもをどうやって増やすかという、創造的な時間の費やし方をしましょうと言いました。

私は、この「一点突破、全面展開」というのが好きな言葉です。ある年代の人は昔の全共闘時代の言葉だと言っているんですが、そ

うじゃないだろうと私は思うんですね。ちっちゃい町ほど、いろんなことをやり過ぎただけじゃないですかね。少ない人と少ないお金を一点に集中し、こじあける。水俣も少ない人間と少ないお金で、環境から突破していったということを言いたいです。

それから40点主義です。40点主義というのは、100点主義じゃないということです。100点であることを求めるのが、特に大学卒の多い職場では多いですね。そんなもの何の役にも立たないですよ。私は40点で行動して、行動しながら100点をめざしていきます。徹底した行動主義です。あの人のやっているのは、100点でないというのは簡単であります。100点であるとはどのような状態か言ってくれと言うと、誰もわからないですよ。変な理屈が蔓延していますね。とにかくやれ、やりながら考えろ、理論より行動だ、そういう考え方を私は持っています。

これで終わらしましょう。まず、自分たちが元気になること、そんなことを考えています。愚痴を自治に変えて、あるものさがしから、これは地元学ですが、そこに公と共と私という概念のきちっとした整理、それから行政参加も住民参加もいろいろある、という図も覚えておいていただければと思います。

少し長くなりましたが、私の話は終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

[2010年10月23日]